

〈社会思想史研究の現在〉

Q. スキナーと J. G. A. ポーコック

——方法論的比較——

森 直 人

はじめに

Q. スキナーと J. G. A. ポーコックは、方法論的な主張を伴った思想史研究を通して、1970年代から英米圏の思想史研究に大きな変化を引き起こした。両者それぞれの思想史研究については国内でも既に多くの紹介がなされ、様々な視点からの理解が蓄積されている。しかし両者の思想史研究相互の関係という点に着目して両者を総合的に扱った研究はいまだ見られない。両者は主として共通の方法論的立場に立つものとして一括して理解され、ただその相違について示唆的に言及されるにとどまっている¹⁾。他方で両者の研究が有する方法論的な相違は無視しうるものではない²⁾。そこでこの相違を析出し、両者の思想史研究相互の位置関係を明らかにすることが本稿の第一の課題である。

また両者が一括して理解されるなかで、ポーコックの方法論がスキナーの方法論理解を介して理解される傾向がある。スキナーの方法論の意義は十全に紹介されている反面、ポーコックの方法論の固有の特徴、それが思想史研究に対して有する積極的な意義はいまだ十分に明らかにされているとは言えない。そこでポーコック

の方法論の特徴を示し、ポーコックの方法論がスキナーの方法論に比して有する固有の意義を明らかにすることが本稿の第二の課題である。

本稿は以上二つの理論的な課題を追求する。第Ⅰ節では両者の方法論の出発点とその共通点を確認する。第Ⅱ節では、テキストにおける著者の行為に関する両者の理解の相違を明らかにし、そこから両者の思想史研究が扱う範囲の相違と相互関係を考察する。第Ⅲ節では、スキナーの方法論を手短かに概説した後、これと対比しながら、ポーコックの方法論を詳説する。第Ⅳ節では、以上のような差異の源泉となる、コミュニケーションに関する両者の想定を確認する。第Ⅴ節では、ポーコックの方法論に固有の認識論的な内容を示す。最後に、これらの考察を概括する。

Ⅰ 両者の方法論の共通点

スキナーとポーコックはそれぞれ方法論に関する幾つもの論文を発表している。ここでは、この論考の出発点として、スキナーの「思想史における意味と理解」³⁾およびポーコックの『政治・言語・時間』⁴⁾の第一章を取り上げて両者の共通点を確認することとしたい。この二編の論文は時期的に近接しているだけでなく、共に当時の思想史研究の状況を批判し新しい方法を提言するものであり、主題的にも共通している。

スキナーが「思想史における意味と理解」で

1) 以下を参照。田中秀夫『共和主義と啓蒙』ミネルヴァ書房，1998年，102ページ。Janssen, P., "Political thought as traditionary action: the critical response to Skinner and Pocock," *History and Theory*, 24, 1985, p. 115.

2) ハンプシャー・モンクは、以下の論文において両者の差異の明示を課題の一つとしている。Hampsher-Monk, I., "The history of political thought and the political history of thought" in *The History of Political Thought in National Context*, eds. by Castiglione, D. and I. Hampsher-Monk, Cambridge University Press, 2001, pp. 159-174.

3) スキナー，半澤孝麿・加藤節編訳『思想史とは何か』岩波書店，1990年，45-140ページ。

4) Pocock, J. G. A., *Politics, Language, and Time*, The University of Chicago Press, 1971. (以下，Pocock [1971] と記す)。

まず批判するのは、「テキストそれ自体が研究と理解のための自己充足的な対象を構成すべきだとの主張に基づく方法論」⁵⁾である。この方法論は、時代を超越した永遠の問題の存在を前提し、また思想史の意義はそれらの探求にあるということをも前提している。このようにテキストが関わるべき問題が歴史家の側であらかじめ決定されていることにより、個々の著者がその問題に対して何を述べているかということに限定した研究、すなわちテキストそのものに限定した研究が正当化される。こうした方法論においては、歴史家が特定の、時代を超えた問題を前提しているために、個々の思想家はそれに対応する「教義」を説いているはずだという想定が暗黙のうちになされる。この想定のもとに、個々の思想家のテキストから、その意図や時代状況を考慮することなく教義が導出され、それが不可能な場合には教義の不在が非難される。さらにこれに際して、この特定の問題に関する教義の体系性・一貫性が、個々の思想家に要求されることになる。思想史は、同一の普遍的な問題に対して異なる時代の様々な思想家が与えた体系的な教義の歴史となる⁶⁾。

一方、ポーコックの批判は哲学（ないし理論）と歴史との間での役割の混同に向けられる。現代的な何らかの観点、何らかの問題を前提にして過去の諸テキストを非歴史的に検討することそれ自体は正当であるが、それは哲学（ないし理論）であって歴史ではない。ポーコックは、理論的な体系性を基準にして選択された諸思想が理論的な共通点と相違点に基づいて関係づけられて行くような思想史を批判するのである。ポーコックはこの点でスキナーの批判の重要性を強調している⁷⁾。

スキナーとポーコックは歴史性を刻印した自律的な方法を思想史研究に要求する。すなわち、体系性や何らかの普遍的な問題といった哲学ないし理論の領域に固有の視点とは異なる、歴史独自の視点に根ざした方法を要求するのである。

しかしながら両者は歴史性を強調するものの、諸テキストを社会的・政治的な状況の直接の反映ないし合理化と見なしそれに還元して理解する手法を採用するわけではない。両者は共に、マルクス主義者およびネイミア学派を例示して、こうした手法を批判している。スキナーによれば、この手法はテキストを生み出す何らかの原因を探求するのだが、テキストに関してはこの原因とは異なっておお把握されるべきものがあるという⁸⁾。またポーコックによれば、こうした還元は、「諸理念の次元」を「他のもっと扱いやすい次元」に引き下げようとしているに過ぎない。テキストについては社会的コンテクストとは独立に（しかしもちろん無関係ではないが）把握されるべき次元が存在するのである⁹⁾。

両者はこの次元を捉えるために、言語行為理論を導入する。テキストは言語行為という次元において、何らかの意味を持った言葉であると同時に、何事かをなす行為であるものとして捉えられる。テキストは言語ルールの枠内で何事かをなす行為であり、この点で優れて政治的である。こうしてテキストに、固有の言語的な次元が認められるとともに、この次元は現実の政治的な状況と密接な関わりを持つものとして理論化されるのである。

以上が両者の共通して選択する道である。まず両者は、同一の普遍的な問題の枠組みにおいてテキストを意味づけ理論的観点からこれを配列する思想史を拒絶し、種々の個別的な次元でテキストを捉える歴史独自の方法を求める。しかし次に、テキストを直接その「現実の」社会的・政治的な状況に還元して理解する立場は、こうした状況とは独立に把握されるべき次元を捉えることができないために、これも十分では

5) スキナー、前掲書、48ページ。

6) スキナーの批判の対象は、実証主義的な歴史研究、ラヴジョイ流の観念史、「影響関係」を基礎とした思想史など多岐にわたっているが、ここではスキナーの方法論の以後の展開およびポーコックとの共通性という二つの観点から重要な、いわゆる「テキスト主義」と「コンテクスト主義」への批判を取り上げる。

7) Pocock [1971] p. 6.

8) スキナー、前掲書、99-109ページ。

9) Pocock [1971] p. 10.

ないとして退ける。そして両者はテキストについて、歴史的で、しかも社会的・政治的な状況に直接還元されえないある意味の次元を、言語の概念を用いて理論的に構築する。テキストは著者の言語的な行為として捉えられるのである。

II 著者の行為

スキナーとポーコックはともに著者の言語行為を捉えようとする。しかしこの「著者の行為」の意味するところは両者の間で異なる。本節では、この意味の相違を明らかにするとともに、従来両者の方法論の差異として指摘されてきた点¹⁰⁾がこの相違に根ざすものであることを示す。まずスキナーの方法に対するポーコックの言及を議論の起点としよう。

スキナーの『近代政治思想の基礎』は、「近代的な国家概念が形成されて行く過程を示す」ことを狙いの一つとしている¹¹⁾。その中でスキナーは、テキストそれ自体およびその社会的状況に加えてイデオロギー的な文脈に着目する自らの方法論の意義を、それが「諸テキストの著者が著述する際に何を行っていた (were doing) かを特徴づけることを可能にする」点にあると主張している¹²⁾。ポーコックはこの一文に、スキナーにおける強調点の移行を見ている。すなわち、スキナーが当初強調していた意図の概念から、著者の遂行の概念へと強調点を移したと考えるのである¹³⁾。そしてさらに、著者の行為の遂行は、著者に後続する行為者に媒介されて、

著者自身にも知りえない、結末のない無数の結果を生み出すのであり、「私たちは」こうした終わりのない遂行に関心を持ち始めたのだと論じる¹⁴⁾。

「著者が『していた』ことには、著者が制御または予言できなかった応答……を他人に喚起することが含まれる。スキナーの定式は、パロールとラングの相互作用の歴史における一つの契機 (moment) を定義するものであるが、しかしそれは同時に、その契機 (moment) を結末のないものとしても定義するのである。」¹⁵⁾

そのうえでポーコックは一つの問いをたてる。「スキナーの再現のない文脈を閉じるべきかどうか、閉じるべきであるならいつ閉じるべきか、を決定することがいまや重要となる。すなわち、著者を起源とするテキストが翻訳・修正・討論されることにより引き起こされる諸々の事柄を、その著者が遂行しているのだと述べることをいつの時点でやめるべきか、ということが問題となるのである。著者の権威と読者の解釈に関する問題の全体が、この一見言葉上の問題と考えるものの中に含まれているということが明らかになる。」¹⁶⁾

歴史家は、テキスト成立時点以降も続くとも

10) 「基本的な方向を等しくする両者の最大の差異は、スキナーがあくまでも個々の思想家の思想の独自性と差異に注目するのにたいして、ポーコックが個々の思想家ではなくパラダイムの析出に関心の焦点をおく点であろう。」(田中秀夫、前掲書、102ページ。)[スキナーとポーコックの根本的な相違は、研究の単位としてポーコックが諸言語およびその変容を通時的な視点から強調するのに対し、スキナーは言語行為の時点 (moment) を強調する、という点にある。](Humphsher-Monk, *op. cit.*, p. 166.)

11) Skinner, Q., *The Foundations of Modern Political Thought*, Vol. 1, Cambridge University Press, 1978, p. ix.

12) *ibid.*, p. xiii.

13) ポーコック、田中秀夫訳『徳・商業・歴史』みすず書房、1993年、8ページ。

14) 同上書、8-9ページ。また、『近代政治思想の基礎』に対するポーコックのレビューにおいても、テキストについての歴史的研究の範囲を著者以外の人々の諸々の遂行にも開くという見解が、スキナーの方法論の立場に関わらせて主張されている箇所がある。Pocock, J. G. A., "Reconstructing the traditions: Quentin Skinner's historians' history of political thought," *Canadian Journal of Political and Social Theory*, 3, 3, 1979, p. 98.

なお、逆にスキナーからポーコックに対する方法論に関係する言及のうち、両者の方法論上の相違を窺えるものとしては、言語の概念を中心とした方法論に対する危惧の表明(スキナー、前掲書、214ページおよび226ページ参照)が挙げられる。しかし、最終論文において「歴史家は、ポーコックが……『諸言語』……と呼ぶものを第一義的に研究する」(同上書、345ページ)と述べていることから考えれば、この言及はさしあたり重要ではない。

15) ポーコック、前掲書、11ページ。

16) 同上書、37ページ。なお一部改訳した。以下を参照。Pocock, J. G. A., *Virtue, Commerce, and History*, Cambridge University Press, 1985, p. 21.

考える言語的な行為の遂行が、どの時点でその終点に達したと考えるべきか。言い換えればテキストの歴史的意味を構成するものは、著者自身の意図に限られるのか、それともテキストを踏まえてなされた読者の発話もそこに含まれるのか。この問題がスキナーの引き起こした激しい論争の一つの核心であったのは間違いない。この問いに対する解答は、思想史に関する理論と方法、実践の各段階で重要な意味を持つだろう。

スキナーはこの問題をどのように考えるだろうか。理論的な視点に立つならば、「批判に答える」において示された以下の選択をこの問題に対する解答と考えてよいだろう¹⁷⁾。

スキナーは、テキストの行為としての側面を一貫して重視する¹⁸⁾。またこの行為が著者自身には意図することも予想することもできなかった多数の力を発動する可能性を認めている¹⁹⁾。しかしスキナーは著者の行為をこの可能性から切り離して定義する²⁰⁾。スキナーは、著者自身の意図のみから理解される著者の行為だけを追究する。つまりスキナーの解答は、著者の行為を理解する上で、それが同時代の人々に、また後代の人々に実際にどのように受容されたかという視点を導入しない、というものである。著者の行為をただ著者の意図のみにおいて理解し、無数の聞き手が与えた応答、これらの応答が織りなす言説の複合体は考慮に入れない。スキナーは、著者の意図のみによって意味づけられ、他者の与える意味が混入していない、いわば著者の純粋な行為を探索することを選択するのである²¹⁾。

ポーコックにおけるスキナーの理解とスキ

ナー自身の言明が異なっていることはここでの関心の対象ではない²²⁾。ここでの関心は両者の差異の検討であり、したがってこの問題に関して両者が異なる解答を与えていることの方が重要だからである。

ではポーコックの解答を見てみよう。この問題に解答するにあたり、まずポーコックは、著者がテキストにおいて遂行するという内容の内容をあらためて考える。ここでポーコックは、スタンリー・フィッシュの「テキストはそれを解釈する人々に対して何ら権威を行使しないと云えるが、しかしもっと正確には、テキストはそれがかつて生み出した解釈の連続体の中で解体するのだ」という議論に触れて、これに同意する²³⁾。ポーコックは、「歴史の脱構築」を前提として認める²⁴⁾。しかしポーコックはその上で、それでもテキストが権威あるものとして認められることが適切であるケースを提示する。それは歴史の脱構築過程の中で、テキストが単に無数の言説や行為に解体されるばかりでなく、権威あるものとして繰り返し再構築されるケースである²⁵⁾。この時、テキストに含まれる定式や原理はそれ自体権威あるものとして繰り返し再述されながら個々の時点において活用される。個々の時点における再述が、当然に著者のオリジナルな記述と異なるものだとしても、したがって無数の断絶を含みながらも、権威と見なされたテキストは、これらの再述を媒介として、時間の中である程度安定した言説の様式を保持

17) すなわちこの選択が『徳・商業・歴史』での問題提起に対する解答として実際に意図されていたかどうかはここでは問わない。理論的な視点から仮設的にこれを解答として扱うものとする。

18) スキナー、前掲書、311-317ページ。

19) 同上書、318-324ページ。

20) 同上書、320-324ページ。

21) これは選択として述べられているのであって規範として提示されているのではない。スキナーはそのほかの研究の仕方を排除していない。

22) むしろポーコックがこうした相違を承知の上でスキナーの定式を転用したということも考えられる。この転用によりポーコックが説明していたのは、発話は著者の意図しなかった仕方でも転用されることがあり、しかもそれは著者の遂行の一部を成す、という内容であった。著者の行為をあくまで著者の意図から同定しようとするスキナーの定式を、著者の発話の転用についての説明に転用する、ということがポーコックの戦略であった可能性は否定できない。なお、スキナーにおける発話の意図と発話的力との関係に対しては、ポーコックはすでに「政治・言語・時間」の段階において疑問を提示している。Pocock [1971] p. 25.

23) ポーコック、前掲書、37ページおよび64ページ。

24) 同上書、47ページ。

25) 同上書、37-38ページ。

し続ける。こうしてオリジナルな記述とその再述の複合体としてのテキストは、その都度の現在において差異を含みつつ再述され、時間の中で延長されて行く。「歴史家は今日、特定のテキストにおいて制度化された特定のパラダイムの、特定の歴史的連続における持続を認識しつつある」²⁶⁾。著者を起源としながらその死後も持続して行くこのパラダイムの連続体が、個々の時点にあって、それぞれ異なった仕方においてではあるが、世界を分節し、実践的必要性の現在を記述するのに用いられるという点に、ポーコックは著者の死後の遂行を見ているのである²⁷⁾。

ここでそもそもの問題に戻って、ではポーコックは、著者の遂行には終わりがあるのか、あるとすればいつなのか、という問題にどう解答を与えるのだろうか。これに対するポーコックの解答は、パラダイムの寿命はあらかじめ決定されているわけではない、というものである²⁸⁾。したがって著者の遂行がいつ終わるのかということをおおきく決定することはできない。この問いはあくまで経験的な研究だけが、個別の著者に即してのみ答えを与えることのできる問いである。どのような仕方であれ著者に起源をもつパラダイムが人々の言説の中にはたらく続けている限り、著者は遂行し続けているのである。

以上のように、等しくテキストにおける著者の遂行を問いながら、スキナーが追究するのは著者の意図のみにより限定される純粋な著者の行為であり、ポーコックが探求するのは後代の人々の様々な行為を重ねて持続して行く諸言語の連続体である。言い換えれば、スキナーの思想史研究は、テキストを媒介として行われる著者ただ一人の行為を問題にしているのに対し、ポーコックの思想史研究は、テキストを媒介として、著者だけでなく無数の応答者が遂行する多様な言語行為を問題にするのである。した

がってスキナーが対象とするのは主としてテキストが成立したその時点であり、それにコンテキストを与えるそれ以前の時代であり、何より著者自身がテキストに与える理解であるのに対し、ポーコックはテキスト成立以前、テキスト成立時点だけでなく、テキスト成立以降現在に至る中間の時代においてそのテキストがいかに用いられ、また理解されてきたかということをも問題にするのである。

III 両者の方法論の理論的構造とその比較

前述のように、両者の方法論に関しては、両者が共通の方法論的な立場に立っているとの前提のもと、スキナー的な方法論理解で一括され、スキナーの方法論の意義が十全に強調される一方、ポーコックの方法論の固有の意義については理解が十分でない現状にある。そこで本節では、前節において示した両者の課題に即して、まずスキナーの方法論を概説した後、それに対比させながらポーコックの方法論を詳説する。その際、両者が用いる用語の含意の相違を指摘して、第V節においてポーコックの方法論に固有の認識論的な内容の提示を試みるための備えとする。

1 スキナーの方法論の概説

以下にスキナーの方法論を概説する。スキナーの方法論については、多くの論者がその変化を指摘している。ここではそうした時間的展開を含めて概括を行う²⁹⁾。

上述のように「思想史における意味と理解」

29) 以下を参照。佐々木毅「政治思想史の方法と解釈——Q. スキナーをめぐる——」『国家学会雑誌』第94巻第7・8号、1981年7月、132ページ。Janssen, *op. cit.*, p. 131. 半澤孝磨「政治思想史研究におけるテキストの自律性の問題（一）——Q. スキナーをめぐる方法論々争について——」『東京都立大学法学会雑誌』第29巻第1号、1988年、37-38ページ。半澤孝磨「政治思想史叙述のいくつかの型について」『思想』第794号、1990年8月、71ページおよび86-87ページ。関口正司「コンテキストを閉じるということ——クエンティン・スキナーと政治思想史——」『法政研究』第61巻第3・4号、1995年3月、224-261ページ。なお、概括するにあたっては、とりわけ関口論文を参考にした。

26) 同上書、39ページ。

27) 同上書、39-40ページ。

28) 同上書、39ページ。

では、テキスト中心の思想史研究および（社会的）コンテキスト中心の思想史研究が批判され、発語内行為の把握とそのための言語的なコンテキストの研究の重要性が主張された。「慣習と発語行為の理解」においては、コミュニケーションについての想定と関係して慣習の概念が詳述された³⁰⁾。「政治思想と政治的行為との分析における諸問題」は、スキナーの方法論を具体的な政治状況のみを重視するものだとする非難に答えて、現実とイデオロギーとの関係を新たに分析し、「思想史における意味と理解」での議論を改訂している³¹⁾。すなわち、言語行為を、単に慣習に前もって規定された類型的な行為と見なすのではなく、言葉の含意を支配するイデオロギーを様々な戦略で変化させることにより社会的な現実介入し働きかける行為として描き直したのである³²⁾。これは「批判に應える」に見られるように、概念的な分節（＝言語）と社会的現実との間の密接な関係を認めた上で、言語行為を社会的・慣習的に定められた何らかの言葉による行為と理解するだけでなく、社会的な規約に主体的に介入してこれを改変する行為としても理解するということである³³⁾。「批判に應える」においては、「政治思想と政治的行為との分析における諸問題」ですでに示されていた「信条」の概念が精緻化される³⁴⁾。互いに支え合う発話者の信条のネットワークが、著者の意図を同定するためのものとして捉えられる³⁵⁾。慣習が明らかにする発語内的力から独立に、信条により意図を同定する通路をつけたことで、発語内的力と意図のギャップを埋め、「意図された力を伴う行為」としての発語内的力の同定を可能にしたのである。

スキナーの理論的な枠組みをまとめよう。言

語に関わるスキナーの諸概念は、人々が世界を分界する諸々の認識のネットワークとしての信条の概念と、人々が互いに発話を行う言語ルールとしての慣習の概念とに大別できるだろう。前者は発話に関わる著者の意図を同定し、後者はその発話が行われた言語的コンテキストにおいて当該の発話が有しうる発語内的な力の範囲を特定する。この二つのルートから、著者が読者に理解されるべく意図した発語内の力の遂行としての発語内的行為を同定することができる。スキナーが古典的テキストについて捉えようとするのは、この意図された発語内的行為なのである。

2 ポーコックの方法論の詳説

ポーコックの方法論の特徴の一つは、理論的なレベル、すなわち、政治思想の歴史とはいかなるものであり、歴史家はそこで何をしようのかという問題を問い、理解の枠組みを組み立てることに重きが置かれている点である。ここでは、ポーコックが思想史のために作り上げた理解の枠組みを中心にその方法論を詳説する。

1) 言語と発話モデル³⁶⁾

ポーコックにおいて、話し手から聞き手への発話は権力行為である。その意味するところは、発話が中立的な情報を伝達するというだけでなく、また聞き手に対し何らかの行為を遂行するというだけでなく、発話がこれらの情報の伝達や行為の遂行を可能にする基盤——この基盤は、両者の関係、両者と伝達される情報との関係、両者を含む世界のあり方、両者の間で遂行可能な行為の類型などを定める——を強いるということにある³⁷⁾。この発話の権力性には、そ

30) Skinner, Q., "Conventions and the understanding of speech acts," *Philosophical Quarterly*, 20, 1970, pp. 118-138.

31) スキナー、前掲書、229ページ。

32) 同上書、234-248ページ。

33) 同上書、340、345ページ。

34) 同上書、263-311ページ。

35) 同上書、348ページ。

36) ポーコックについても方法論における重点の移動を指摘する論者がある（中島隆博「政治思想史の再構築について——J. G. A. ポーコック『儀礼・言語・権力』序説——」『中国哲学研究』第7号、1993年、60ページ）。しかしここでは、スキナーの場合と異なり、ポーコックが自身の方法論を明示的には改訂していないこと、および、中島論文は連続性を認めながらあえて強調点の移行を指摘しているものであることから、ポーコックの方法論の時間的変化については考慮しないこととした。

37) ポーコック、引田隆也訳「政治言説史と言語の政治ノ

れ自体に根ざした制限がかかる。聞き手は、第一に、話し手の課したルールを明らかにし、これを踏襲することにより話し手自身をこのルールの中に束縛することができる。第二に、話し手が当初なしたのと同様に、新たに自身のルールを伴って発話することで、話し手が課したルールを逃れてこれを書き換えることができる³⁸⁾。

この発話の権力性と、それにかかる二つの制限から、言語の理論的性格が描かれる。言語とは、話し手により強制され聞き手により踏襲されることにより、複数の参加者に利用可能となった発話のルールである³⁹⁾。しかしこのルールは不変のものではない。言語は、ルールが強いられ、これが踏襲されまたは書き換えられ、この踏襲されまた書き換えられたルールが更に踏襲され書き換えられて行く無限の過程の途上にある。ここで幾つかの含意を確認しよう。言語のルールは発話と同じように権力を行使するが、これに対しては踏襲と書き換えの可能性が想定される。言語のルールはつねに変化の過程にある。そして現在の言語のルールは過去の発話の記憶を通じてのみ知られる⁴⁰⁾。過去の記憶は変化の過程が生んだ異なるルールを含むために、言語のルールは多元的である。言語は、過去の無数の参加者が無数の意図で発話し無数の思考をそこに表現した過程を通じて形成されたものであるから、質的に異なる無数のルールを含む⁴¹⁾——たとえその大部分が忘れられているにしても。

議論の主題は、二者間の発話から、言語とその利用者・参加者という枠組みへと移る。ここで、発話者によるルールの人格的な強制という点を、言語による制度的・非人格的なルールの

強制という形に書き換える概念装置が必要となる。ポーコックはこのために、クーンの「パラダイム」の概念を導入する。ただしポーコックはこの概念を論争を避けえないものとして、クーン自身の定義を自ら明示的に書き換えた上で使用する。クーンの定義によれば、パラダイムは人々の認識の仕方を要約して示すものである。加えて、その認識の仕方を人々に強制する——人々はそれ以外の認識の仕方をブロックされる——と同時に、この認識の仕方に応じる形で現実の権力の構造を規定する。ところで科学のコミュニティにおいてはパラダイムは単一であると想定されていた。ポーコックはこの点に変更を加えて、政治のコミュニティにおいては、互いに異なる多数のパラダイムが存在し、それらのパラダイムは互いに交流しあうものと想定する。言語は様々に異なる状況・認識・目的・力を含む発話の堆積であるが、こうした堆積が現在において人々の思考と発話を規制する仕方を、ポーコックは多元的なパラダイムの概念を通じて理解する⁴²⁾。

パラダイムの概念を介して、言語は人々の思考を分節し、規制し、それにより現実の権力を配分する権力的かつ非人格的な枠組みとして描かれる。ここで言語の総体にあつては多数のパラダイムが存在するものと想定される。ポーコックは異なる言語ルールが交錯するこの総体的な言語を「政治の言語」と名づける。政治の言語は多様な目的のため多様な仕方で用いられ、多様な思考を表現することができるものである⁴³⁾。

言語の抽象的な理解は得られた。次に、具体的な現実として現れる言語を考えなければならない。ここでポーコックは、具体的な言語を、社会の様々な「制度」から現れるものとして描く。『制度』とは、個人の意志の単一行為に決してとどまらない仕方で社会において確立され

「学1——メリーランド大学講義」『みすず』第402号、1994年9月、28-31ページ。

38) 同上論文、31-33ページ。また、ポーコック、『徳・商業・歴史』33-34ページ。

39) 同上論文、33-34ページ。

40) 同上論文、34ページ。

41) ポーコック、引田隆也訳「政治言説史と言語の政治学2——メリーランド大学講義」『みすず』第403号、1994年10月、68-69ページ。

42) 同上論文、73-77ページ。

43) この政治のパラダイムの概念については以下を参照。同上論文73-78ページ。および Pocock [1971] pp. 13-24.

ているものを言う。』⁴⁴⁾そして、「制度化された社会的行動様式の一つ一つは、それ自身がまた同じく制度化されている言語——制度化された社会的行動様式の働きに伴うあるいはそれから生ずる全ての行為や知覚を分節化する言語——を所有する……」⁴⁵⁾。こうして各々異なる制度を基礎とする、異なる多数の言語の共有が描かれる。これらの言語は交流して一つの多元的で複雑な言語、すなわち政治の言語を形づくる。

もう一つ、言語について確認しておかなければならない点がある。それは、ある言語の働きについて、その言語を対象として思考する別の言語が生成しようということである。ポーコックは前者を一次的言語、後者を二次的言語と呼ぶ（この次数は相対的なものである。絶対的に一次的な言語が想定されているわけではない）⁴⁶⁾。この一次的言語と二次的言語の関係はポーコックの理論において、その言語の政治性・歴史性において重要な意味を持つが、それらについては以下に順次検討する。

2) 言語の政治性

ポーコックは、言語に関して二つの政治性を認めこれを区分しているように思われる。第一の政治性は言語的な次元と現実の権力配分との関係に関わる。そして第二の政治性は言語の多元性に関わっている。

言語は認識のレベルにおいて機能するのみならず、現実の役割や権力の配分を表現した規制するものであった。したがって、発話は言語のレベルで働くと同時に、現実の社会的・政治的状况における行為としても働く。この点は、スキナーが用いる言語行為論の枠組みにおける発話の意味、すなわち発話が何事かをなすという意味で政治的であるという点と共通である⁴⁷⁾。言語が現実の制度や権力配分と不可分

あり、それを表現しその機能を支えるものである限り、言語のレベルでの出来事はつねに政治の性格を帯びる。これが第一の政治性である⁴⁸⁾。

しかしポーコックが政治という言葉を用いる時の意味はこれにとどまらない。社会には多数の制度が存在し、それぞれがこの制度の働きと不可分な制度の言語を有する。こうして互いに質的に異なる多数の言語が織りなす「政治の」言語が現れる。第二の政治性とはこの意味での政治性、すなわち言語的な次元における権力の共有を意味するものである。たとえば何らかの発話がなされたとき、この発話は特定の言語において特定の意味を有するものであるが、しかしそのほかの言語の枠内に置けばそれとは異なる意味を有しうる⁴⁹⁾。二者間の発話のモデルに立ち返るならば、話し手は特定のルールとともに発話して、この発話により何らかの意味ないし力の発動を狙うかも知れないが、聞き手は（意図するとしないうちに問わず）これと異なるルールにおいて反応し、異なる意味ないし力においてこの発話を受容することが可能であり、ないしそのように受容してしまうのである⁵⁰⁾。どんな話し手も意図したとおりの意味において自らの発話を受容させることはできない。ポーコックによれば、発話において話し手の意図が発話の意味を支配するものとされているならば、そこにはコミュニケーションは成立しない。発話の権力性を踏まえれば、こうした発話はコミュニケーションではなく一方的な支配関係であるだろう⁵¹⁾。コミュニケーションとは、発話が話し手の意図しなかった、しかも話し手にはコントロールすることのできない意味において聞き手に受容され、聞き手がこの意味において

44) 同上論文、69ページ。

45) ポーコック、引田隆也訳「政治言説史と言語の政治学 3——メリーランド大学講義『みすず』第410号、1995年5月、101ページ。

46) 同上論文、106ページ。

47) スキナーにおいて「政治」の語は、理論ないし思想に関する限り、それらが実際の「政治の世界」で何らかの

役割を演じるということをして用いられる。スキナー、前掲書、213ページ参照。

48) Pocock [1971] pp. 14-15.

49) ポーコック、「政治言説史と言語の政治学 2」76-77ページ。また、Pocock [1971] p. 17.

50) ポーコック、「政治言説史と言語の政治学 1」35ページ。

51) 同上論文、34-35ページ。

反応する限りにおいて成り立つものなのである⁵²⁾。この意味での権力の共有が、言語の第二の政治性である。すなわち発話が権力配分と関わる言語の枠組みの中で何らかの（権力を含んだ）行為であるという意味においてではなく、そもそも発話がどの言語の枠組みの中でいかなる意味を与えられるべきかが争われる次元が存在し、この次元においてはどの言語も（したがってどの主体も）決して完全な支配を打ち立てることなく、諸言語および諸言語の参加者の間で発話の意味に関する権力が共有されるという意味において、言語は政治的な（ポリス的な、すなわち相互に支配し支配される関係を形づくる）ものである。「相異なる知的ディシプリンが出会う地点を形成し、またその地点を自らの場とすること、これこそが政治思想の特質なのである。」⁵³⁾

3) 言語の歴史性

スキナーにおいて、言語慣習の歴史性とは、その時代に固有の言語慣習がもつ個別性であり、また異なる時代における言語慣習間の異質性である。現代とは異なる言語慣習において著者が理解していたテキストの意味を再現することが、スキナーの歴史性に関する方法論的要求であり、こうした異質性が思想史研究の有意性をなす⁵⁴⁾。ポーコックにおいても、スキナーの意味する言語のこうした歴史性は認識されている。しかしそれは、ポーコックにおいて歴史の語が有する含意の一部分でしかない。そして異質性という意味での歴史性は、ポーコックにおいて、言語が変容するプロセスの帰結として示される。異質性を言語の第一の歴史性とするならば、時間的に変容し堆積する言語の性質は言語の第二の歴史性と呼べるだろう。

発話とその受容を可能にする言語は、先行する発話の記憶により構成されている。かつてある発話が何を意味し何を伝えどんな効果を及ぼしたかという記憶が、現在のその発話を理解す

るべき枠組みとしての言語を形づくる。発話はそれに歴史的に先行する無数の発話の記憶によって理解されるのである。この意味で言語は歴史的次元を有する。そしてこの歴史的次元は、言語の第二の政治性によって飛躍的に拡大する。人々は、特定の言語における意味を意図してなされた発話を、他の言語において、とりわけ発話者の言語について語る二次的言語において理解し応答する。これにより、ある発話を理解するのに用いられうる諸言語は、過去に向かっては今は忘れ去られ潜在化した古代の諸言語の深みにまで拡大し、また未来に向かってはおおよそその発話に関わりうる諸言語の一切にまで及ぶ。もし第二の政治性を認めた上で発話が有する歴史的意味の広がりやを問うならば、その広がりや、その発話に関わって実際になされた解釈やそれが実際に引き起こした行為の一切にまで及ぶだろう⁵⁵⁾。

発話の歴史的意味のこのような広がりや、さらに以下の含意を有する。言語とは発話を介して構成され変化するルールである。そして言語は、ある発話により発生する意味や力、またそれにより表現される思考を蓄積する。ある発話が何らかの意味や力、思考としてなされ、また別の仕方でも反応されるとき、言語には変化が生じているのである。繰り返される発話と受容は次々に言語に新しい意味や力、思考の可能性を蓄積させて行くだろう。他方で言語は、人の記憶によってのみ支えられるものであるから、かつてあった意味や力、思考の可能性を忘れ去て行くだろう。こうして言語はそれに表現可能な意味や力、思考の質や範囲を変化させて行くのである。ある二つの時点の間の言語慣習の差異は、その二つの時点の間に新たに見出された言語の可能性から忘れ去られた言語の可能性を減じたものに等しい。発話における権力の共有、すなわち言語の第二の政治性を介して絶えず言語に引き起こされる変化、これが言語の第二の歴史性である。この第二の歴史性を介して、第

52) 同上論文、35ページ。

53) 同上論文、15-16ページ。

54) スキナー、前掲書、366ページ。

55) この言語の歴史性については、ポーコック、「政治言説史と言語の政治学1」34ページを参照。

一の歴史性すなわち探求される時代の言語慣習と現代の言語慣習の異質性が理解される。過去の言語慣習と現在の言語慣習の異質性は、言語の様々な理解と使用の仕方が新たに創造され他方で忘却される過程、言語が絶えず新たに顕在化し潜在化して行く過程を通じて理解される。諸言語は発話を介して変化する時間的な連続体を形づくる⁵⁶⁾。

テキストが成立したその時点から著者の言説が辿ることになる過程を探求するという、前節で示したこのポーコックの課題にたいして、言語の政治と歴史の概念は以上の形で理論的な枠組みを与えるのである。

4) テキストとコンテキスト

このポーコックの理論的枠組みの中にテキストをおくならば、それはどのように理解されるだろうか。テキストとコンテキストはいかなる関係において現れるだろうか。ポーコックは、テキストについて次のように述べている。テキストは「多数の言語から成」る複合体である⁵⁷⁾。テキストは「ラングとパロールから、すなわち安定的な言語構造と発話行為とそれらを変形する革新とから成る」⁵⁸⁾。テキストは制度の言語ないし政治の言語が現れ、更にこれに対する二次的言語が生じて行く言語の連続体の一部を成す。著者は、テキストにおいて、「言語と歴史的経験の両者からなる、無限に多様な文脈における無限に多様な言語行為の遂行を継続し——多かれ少なかれ急激に、根底的に、そして『独創的に』——変形する」⁵⁹⁾。

スキナーにおいては、テキスト成立の同時代ないしそれ以前の時代における様々な言語慣習が理解を与えるコンテキストであり、このコンテキストを参照することにより、テキストが何を行っているかを理解することができるとされる⁶⁰⁾。後述するスキナーにおけるコミュニケー

ションの理解を基礎とするならば、テキスト成立時点でコンテキストを閉じることが「正確な」テキスト理解に不可欠となる。テキストが著者の意図したコミュニケーションであるならば、それは著者の意図が同定されうる著者の言語慣習のレベルで捉えられなければならない、そのためには著者の言語慣習においてコンテキストが閉じられなければならない。

しかしポーコックにおいてはテキストとコンテキストとの間の関係はきわめて複雑であり暗示的でもある。そのうちポーコックが明示的に議論している点だけを抜き出すならば、テキストに含まれる言語は先行する諸言語をコンテキストとして理解しようと同時に、後続する諸テキストに対するコンテキストとして理解するという両義的な関係を見ることができる。「歴史家が読解を習得した言語の解明は、かれが同時に二つの方向で自らの探求を進める手段である。言語が発話される文脈の方向、および言語自体が与える文脈とその言語が置かれるその先の文脈の内部において、またそれらの文脈に対して遂行される発話と発話の行為の方向がそれである。」⁶¹⁾テキストは、先行する諸言語とそれを書き換える諸言語の複合体であるが、同時に後続する諸言語に対してコンテキストを与える。テキストを理解するためにはそれに先行する諸言説を知ることは不可欠である。しかし、そのテキストが、先行する言語として、後続する諸々のテキストや行為を可能にしたという側面からの理解も重要なのである。ポーコックにおける言語の政治性と歴史性からするならば、テキストが歴史上実際に関係した言語に向かってコンテキストを開くことが、テキストが有する

56) 同上論文, 14-15ページ。

57) ポーコック, 『徳・商業・歴史』19ページ。

58) 同上書, 36ページ。

59) 同上書, 36ページ。

60) スキナーは、自らのアプローチが、「結果として、テキストとコンテキストとのいかなる範疇的区別にも挑

／戦することになる」と述べている(スキナー, 前掲書, 344ページ)。これはテキストがそれを取り巻く言語慣習に変化を及ぼすという事態を指している。しかし前述のように、スキナーは著者の発話行為をその引き起こす諸々の結果から切り離して定義することを通じて、テキストとコンテキストとの関係を固定している。少なくとも、ポーコックの場合と異なり、テキストとコンテキストの両義的な関係が論理的に貫徹されているとはいえない。

61) ポーコック, 『徳・商業・歴史』18-19ページ。

意味の広がりをつめるために必要となる。そしてこの開かれた意味の全体がテキストの「歴史的意味」を構成する。「マキャヴェッリとホップズに対する応答を文書形態で残したすべてのひとによって読まれたようにマキャヴェッリとホップズを読む」ことが歴史家の課題となる⁶²⁾。そこでは、テキストをつめるために、歴史上実際に投げかけられた理解の一切と、そのテキストを介して世界を分節した認識行為の一切とを、それらが文書として歴史家の手に残されている限りで、歴史家自身の理解の中に復活させようとする試みがなされている。こうした試みがもし成功したなら、現代の人々の認識の中にそのテキストが結ぶ像が、いかにしてその像が形成されるに至ったかという歴史的な形式へと分節されて示されることにもなるだろう。現在の言語はある過去の言語とそこからの変化の総体として表される。

こうしたポーコックの方法論を踏まえて、前節において示した「著者の遂行」の意味をあらためてまとめよう。発話は権力行為である。これは、単に現実の権力システムと言語システムとの相関関係に基づいて発話が何らかの権力を帯びるということを意味するだけでなく、発話が言語的でありかつ権力的であるシステム（認識と対話のパラダイマティックなパターン）を含んでおり、聞き手は——それを踏襲するにせよ拒絶するにせよ——このパターンの作用のもとで応答しなければならない、ということの意味する。著者の発話を含む言語的なパターンは、このようにして聞き手の言語の中に入り込み、聞き手の発話のうちにその言語的な遂行を継続する。著者のつくり出した言語的なパターンは、こうして多数の読者の発話に媒介されて言語的な遂行の連続体を形づくるのである⁶³⁾。

IV コミュニケーションに関する両者の想定

以上に述べた著者の行為に関する両者の選択

およびそれに基づく方法論の構成の相違について、コミュニケーションに関する両者の想定との相違から理解を与えることが本節の課題である。

スキナーは「批判に応える」において、多様な記号体系が同時に存在し、また同一の発話の力が多数存在しうることを認めている。また発話を取り巻く状況のこのような多元性に対して、それらの真偽や客観性を判断する決定的な審級が存在しないことも認めている⁶⁴⁾。しかし、ポーコック的な意味での言語の政治性はここには現れない。「人がコミュニケーション行為を遂行し成功する際にもつ意図は、成功という前提からして当然、公的に判読可能である」⁶⁵⁾。スキナーにおいては、コミュニケーションの「成功」——すなわち著者の意図する力の遂行を読者が正確に理解すること——のために、同一の慣習が要求される原則は決して崩されることはない。もしこの点で、ポーコックにおけるように、コミュニケーションを成功も失敗もありえない相互に権力的で相互に開かれた出来事だと見なすならば、対話者の間ないし諸言語の間での権力の分有、および絶えざる継承・書き換え・忘却が生み出す動的な過程、すなわち言語の政治と歴史とが現れるだろう。

コミュニケーションに関する両者の想定のような相違は、人は同時に同一の発話の話し手でありかつ聞き手であることが可能か否かという点における相違に根ざしているのではないと思われる。スキナーの言う意味でのコミュニケーションの「成功」が可能となるためには、ある同一の発話について話し手が実際に何を意図し聞き手が実際にどう受容したかを同時に知ることができなければならない。ここでいう意味での聞き手の理解を、その聞き手が自らの理解について行う何らかの発話によって得ることはできない。それは既に異なる発話であって、当初の発話についての聞き手の受容とは異なるからであり、またこの当初の発話についての聞き手の発話をどのように受容するかという問題

62) 同上書、24ページ。

63) ポーコック、「政治言説史と言語の政治学 1」27-31ページ。

64) スキナー、前掲書、292-293ページ。

65) 同上書、351ページ。

が生じるからである。スキナーはコミュニケーションが「成功」すべきことを前提することによって、人が同一の発話について同時に話し手であり聞き手でありうることをも前提している。こうしてスキナーの描く思想史の理論的構造は、慣習を共有する全ての話し手と聞き手の位置に自己を投射した、自己同一的な諸主体が言語行為を行う世界となる。それ故にこそ、同一の慣習を前提とした著者（話し手）の意図の同定、テキストの歴史的アイデンティティの探求が正当化されうるのである。

これに対しポーコックは、現実には人は同時に同一の発話の話し手であり聞き手であることはできない、現実には人はある同一の発話について話し手であるか聞き手であるかのいずれかである、という認識を貫いているように思われる。現実には、全ての発話に越えることのできない断絶がある。同一の発話について、話し手は聞き手になることができず、聞き手は話し手になることができない⁶⁶⁾。そしてこの断絶は、とりわけ歴史家の足元にある。歴史家に先行する一切の思想に対して、歴史家は聞き手なのであり、そしてこの関係それ自体は変更することができない。発話モデルにおいて話し手が聞き手に一方的に権力をふるい、聞き手のあり方と世界の分節を自らの発話において規定したように、歴史家は先行する諸思想により、自らの認識の分節、思考の様式、そして自らが何ものであるのかを一方的に規定されている聞き手なのである。歴史家にできるのは、自分自身が話し手である、自分自身の発話において、先行する諸思想を理解することである。そしてこの行為を通じて、歴史家は、歴史家自身を暗黙のうちに決定している言語のルールを明示し、これをあらためて自覚的に選択する（継承）か、これと異なる新たなルールを、新しい思考と行為の可能性を探索する（書き換え）かの選択を自らに、また他の人々に与えることができる。

コミュニケーションに関するこうした想定との相違は、言語の変容をどのように理解するかという問題に対して重要な意義をもつ。ポーコックは、話し手と聞き手の間の言語的な断絶をコミュニケーションに関して本質的なものとみなすことにより、この問題に対して有効な解答を与えている。次節ではこの問題について検討する。

V 言語の変容と歴史家

この節では、スキナーとポーコックのそれぞれが構築した思想史に関する理解の枠組みがもつ認識論的な内容の相違を検討する。そこで問題となるのは、言語がいかに変容するか、それがどのように連続しまた断絶するか、そしてこの言語の連続と断絶の中で歴史家は著者とのどのような関係に立ち何を行うのか、という問いに両者が与える解答である。この問題の検討を通じて、ポーコックが構築した理解の枠組みにより与えられる解答の固有の意義を示すことが本節の課題である。

「政治思想と政治的行為との分析における諸問題」の後半部分では、テキストについて、その現実の政治的な次元だけでなく、言語的な次元をも参照する必要性が主張された。テキストは、言語的次元において、現実の政治に対し有意な働きかけを行う。その働きかけとは、現行の支配的イデオロギーがある行為や現実に与えている「評価」を、「評価—記述的」な語彙を活用して改変する、ということである。つまり、ある行為や現実が人々の意識において帯びる評価を、テキストはそれ自体の言語行為において改変することができるのである⁶⁷⁾。

しかしここに疑問が生じる。この説明の中でスキナーは、人々が自分の行為にマイナスの評価を与える支配的イデオロギーの用語法を自らの発話行為を用いて改変する、と述べている⁶⁸⁾。

67) スキナー、前掲書、233-248ページ。

68) たとえば、「一七世紀初頭のイングランドで、自分たちの新しい、商業的で資本主義的な事業の正統化に関心を抱いていた人々」が、「この好ましくない行動を正統化するための試みの一つとして、通常は宗教生活の理

66) 以下を参照。ポーコック、『徳・商業・歴史』36ページ、および「政治言説史と言語の政治学1」33-35ページ。

しかしこれは、実際に起こった出来事、実際に辿られた歴史的思考の説明として妥当だろうか。問題となるのは、人々が支配的イデオロギーの内部にあって、いかにして記述と評価を分離し、好ましくないとされる行為を好ましいものに転じる可能性を知覚し、どのようにその手段を考察し、選択し、実行したのか、またそうした転化がどのように実現したか、という過程の説明である。すなわち、人々はどのようにして特定のイデオロギーにおいてその可能性を与えられていない思考をなしうるのか、そしてこうした思考がどのようにして人々に共有のものとなるのか。スキナーはこの点に関して明確な説明を行っていない⁶⁹⁾。ただここで「批判に應える」における「慣習が挑戦されたり常識が完全に覆される時点を公平に扱いたいのであれば、著者というカテゴリーなしで済ませるわけには全くいかない」⁷⁰⁾という記述を参照するならば、スキナーの想定において現実を直視し現実と言語の関係を思考する主体的な力が著者というカテゴリーに認められているものと考えられる。スキナーにおける言語慣習の変化は、この著者のカテゴリーにおいて理論化されているのである。

スキナーにおいて言語の変容を引き起こすのは現実の新しい認識であり著者の意図した行為である。著者は現実を新たに認識し、著者の意図した主体的な行為が言語の変容を引き起こす。しかし一方で言語が認識に対しパラダイマティックな力をもつものとして提示されるならば、他方で言語が人々に共有の発話の様式として提示されるならば、現実の変化と著者の意図的行為は、少なくとも直接的には言語の変容に

ついて有効な理解を与えることはできない。現実がいかにして新たに認識されるか、その認識がどのようにして使用可能な語彙として人々に共有されるのか、この言語的な経過を明らかにすることが必要となるからである。言語慣習がパラダイマティックな力をもつならば、著者はどのようにそれを逃れて新しい現実認識をなしうるか。また言語が人々に共有の語彙であるならば、新しい現実認識はどのように人々に共有されるのか。

こうした言語の変容の問題はポーコックにおいて以下のように理解される。言語の形成についてポーコックは、『政治・言語・時間』において、「パラダイムの諸構造が必ず見せる性質に関する」「一般的な仮説」を提示している⁷¹⁾。その仮説とは、「体系的な政治思想の全て、パラダイム的な言語の全てが、時間に関する構造を有しているものであり、そしてこの構造は、政治社会それ自体を時間において存在するものとして概念化する一つないし複数の様式を具体化するものであるということが証明されうる」というものである⁷²⁾。「これらの構造は以下のことを記述するのに利用可能な諸言語から生じる。すなわち、ある新しい出来事が、政治（ポリス）を取り巻く時間の連続体——この時間の連続体はそうした新しい出来事から構成されるものであり、したがって偶然性の次元として認識される——において現れるとき、その出来事はいかにして認識されうるか、そしてそれに対しいかなる行為が可能であるか、ということを経述するのに利用できる言語から生じるのである」⁷³⁾。言語は、偶然性が支配する時間の次元において形づくられる。そこで人々は共有の認識図式としての言語を介してのみ認識し、思考し、行為することができる。「著者は歴史的に与えられた世界に住んでおり、その世界は歴史的に与えられた多数の言語が利用可能にする仕方でのみ理解できるにすぎない」⁷⁴⁾。人々はこ

く、想を推奨するのに使用される概念を用いてその行動を記述することを選んだ」と述べられる（同上書、239ページ）。

69) ポーコックは、前述のレビューの中でスキナーにおけるイデオロギーの語の用法に関わって、『近代政治思想の基礎』は特定の人々に特定の諸言語が利用可能であり他の諸言語が利用不可能である理由の理解については重点を置いていない、という指摘を行っている。Pocock, J. G. A., "Reconstructing the traditions: Quentin Skinner's historians' history of political thought," *Canadian Journal of Political and Social Theory*, 3, 3, 1979, p. 99.

70) スキナー、前掲書、345ページ。

71) Pocock [1971] p. 39.

72) Pocock [1971].

73) Pocock [1971].

74) ポーコック、『徳・商業・歴史』7ページ。

のように過去の諸言語のパラダイムの拘束のもとで現実を認識する。しかし時間的次元においては、この認識図式としての諸言語が整合的な仕方を取り扱うことの出来ない無数の出来事が連続的に生起し、人々にその新しい認識とそれへの新たな対処を迫る。人々は、現在そこにおいてのみ認識が可能な過去の諸言語の内部にありながら、それとは異なる仕方で見出すことのできない現実を探求しなければならない。政治的な発話は実践的必要性の現在に関わるとしても、それは「実践の現在の必要が何であるかを発見するための苦闘にたえず携わっている」のである⁷⁵⁾。

このように、現在それへの対応を迫られている現実が先行して存在したから著者がそれを発見したのではない。少なくとも直接的・単線的な仕方ですぐだったのではない。現実が人々に認識と対処を迫るにしても、しかしその現実はいまだ人々に認識できないものである。歴史的に著者に利用可能な幾つもの、おそらくは無数の言語をそれぞれの限界を越えて使用することによって、これを表現する端緒が与えられる。

著者に利用可能な諸言語の限界を越えて新たな現実を表現する新しい言語の可能性を開くのは、その諸言語について語る二次的言語である。スキナーにおいては、言語を改変する主体的な力が著者のカテゴリーに認められていたが、この点もポーコックにおいては言語の概念から基礎づけられている。ある言語から距離をとるためにはそのためにあつえられた別種の言語を必要とする。言語に対する主体的な選択の可能性は、その言語について語る二次的言語により与えられるのである。発話のモデルにおいては、聞き手の役割はさしあたり話し手の発話が暗黙のうちに聞き手に強制する役割でしかありえないが、聞き手はこの強制を明示し、これを踏襲しあるいは書き換えることで話し手の権力を離脱することができた。言語に対する人間の関係は、話し手に対する聞き手の関係にパラレルで

ある。著者は自身に利用可能な諸言語について語ることににより新しい現実認識の可能性を手にする。

こうして著者が切り開いた認識が、さらに共通の現実となるためには、それに与えられる表現が人々に共有の認識図式、共有の言語とならなければならない。言語とは人々に共有の語彙だからであり、著者一人が新しい認識を新しい言葉で表現したとしても、それが人々に共有のものとならない限り、それは現実ではありえないからである。言語の変容を思考する上で、著者の言葉がいかんして受容されるかという契機は不可欠のものとなる。後述するように、著者に端を発し受容と応答を媒介して持続する遂行を捉えようとするポーコックの方法論は、この点に理解を与えるものである。

このように、従来の言語をその限界を越えて使用する思考と対話の試みにより、新しい現実を表現する新しい言語が現れる。経験が、人々に認識可能な経験となるのはこの時である。言語は間違いなく社会的経験から作られる。しかしその形成は、複雑な過程を経過するのであり、その経過には「時間がかかる」⁷⁶⁾。言説史はこの時間を重視する。

「……歴史家は長い時間をかけて、幾多の内外の圧力に応答して形成されるものとして言語を理解するために、ある時の言語はそのときの経験の結果をただ指し示したり、反映したり、あるいは結果自体であったりすると想定しないのである。むしろ、言語は経験と相互作用する。言語はそれを通して経験が認識され表現されなければならない範疇、文法、心性を与えるのである。言語の研究において歴史家は、ある社会の住人はいかんして経験を認識できるのか、どのような経験を認識できたのか、そして経験に対するどんな応答を表現でき、したがって遂行できるのかを学ぶのである。言説の歴史家であるかぎり、経験の過程のうちで言説（理論を含む）において何が起き

75) 同上書、22ページ。

76) 同上書、51ページ。

たのかを研究することは努めである。そしてとりわけこのようにして、歴史家は、研究対象である人々の経験について多くのことを学ぶのである。』⁷⁷⁾

では歴史家は、この言語の変容に対してどのように接近できるだろうか。政治的な発話は現在の実践的な必要性を発見しようと苦闘する。言語の変容はこうした苦闘のうちに生じるものである。そして著者がそこに置かれている「実践的必要性の現在」⁷⁸⁾は、「彼らが用いた言語の媒介を通して私たちのところにたどりつかなければならない」⁷⁹⁾。歴史家が、彼らのおかれていた現実を知ることができるのは、彼らが伝来の言語においては不可知の現実を新しい仕方で言語化したその言説が、歴史家の時代にまで持続し、それが歴史家にその現実の認識を可能にしてくれている限りにおいてのことである。歴史家がその著者の置かれた実践的必要性の現在を見るための通路は、少なくとも第一義的には、他ならぬ歴史家が関心を持っているその著者の苦闘により与えられたものである。したがって、その著者自身が切り開いた現実についての知識を先行条件としてその著者の認識過程を「説明」するならば、そこには順序の逆転がある。

あるテキストに関して、そこで生じていると思われる言語の変容に先行しその原因となったであろうような現実の変化や著者の意図を、そのテキストを研究している歴史家はどのようにして知ることができるだろうか。著者自身の表現しなかった現実の変化を現代の歴史家が他の資料から知することは当然ありうるし、そうした現実の変化により言語上の変容に理解が与えられる可能性はつねに存在する。しかし著者の引き起こした言語上の変容によりはじめて表現を与えられた新しい現実の存在が推定される限りにおいて、言語上の変容を第一に、すなわち「言語を一つの独立変数として」⁸⁰⁾考えるポー

コックの解答が説得力を有するのは明らかである。他方で、著者が捉え知らしめようとした新しい現実認識が実際に現実となるためには、それが人々に共有の言語とならなければならない。このことは、それが受容と応答——おそらくは無数の誤解や曲解、攻撃や見当違いの同意を含んだ——の長い過程、そして変形を余儀なくされる長い過程を辿らざるをえないということを意味する。ここでポーコックの、著者の言語行為以降の受容と応答を問う、という選択の含意が明らかになる。それは、著者の認識が、変形しながら、人々に共有の言語となって行く過程を問いかけるものなのである。そして同時に、言語が変容しつつ持続して行くこの過程こそが、過去と現在、著者と歴史家を結びつける。なぜなら著者の置かれていた現実、その時代の言葉を介して現在にまでたどりつかなければならないからである。つまりこの現実について歴史家に教えるのは、第一義には、著者に端を発し無数の応答を介して現在に至るまで持続する諸言語の連続体なのである。

したがって、その時代の現実の経験も著者の意図も、可能な限り多くの諸言語を媒介して探求されなければならない⁸¹⁾。言語の変容は、現実や主体を直接先行する原因とするのでなしに、諸言語の変容そのものにおいて捉えられなければならない。なぜなら現実も主体も諸言語の複雑な関係の中に現れるものだからである⁸²⁾。そして、ポーコックの言説史の手法、言語の政治と歴史という枠組みは、質的に異なる諸言語が交錯し変形して行く複雑で時間的な過程を（ポーコックの文体同様に込み入ってはいるものの）理解可能な形式へと組織化する方法なのであり、この方法は徹底して言語外の説明原理

77) 同上書、50-51ページ。

78) 同上書、23ページ。

79) 同上書、23ページ。

80) ポーコック、「政治言説史と言語の政治学3」107ページ。

81) この要請が「諸言語を介して」であって、単一の言語を介して、ではないことに注意しなければならない。歴史を叙述するのに、固有の価値を志向する単一の言語を以てするならば、とりわけその言語が当の歴史上の支配的な権力の側の言語であるなら、叙述される歴史は最悪のものとなるだろう。なお、以下を参照。ポーコック、「政治言説史と言語の政治学1」34-35ページ。

82) ポーコック、『徳・商業・歴史』51-52ページ。

を排して構築されているのである。

まとめれば以下になる。著者は過去の諸言語の内部で、現在の実践的な問題を認識するべく、諸言語について語り、問題の新しい表現を与える。しかしこの新しい表現は、人々の受容と応答を介して共有されてはじめて人々に共通の経験となる。また著者の置かれた現実、そのときそれを語るのに用いられた諸言語の現代に至る持続を通じて歴史家に知られる。そして諸言語を現代に至るまで持続させるものは、著者のテキストに対する受容と応答の過程なのである。

一方で人々に共有の認識と対話の図式としての言語の変容はこの受容と応答の過程に踏み入ることなしには捉えることができず、他方で歴史家を著者の時代の現実と言語に結びつけるのもこの受容と応答の過程に他ならない。歴史家が著者の時代の現実と言語の関係、またその変容を考える上で、この受容と応答の過程、諸言語の連続体を思考する可能性は決定的な重要性を有する。テキストにおける著者の遂行以降の遂行に関するポーコックの理論——諸言語の変容に関して政治および歴史の概念で形づくられる理論——はこの思考の可能性を与えるものである。

最後に、両者における歴史家というカテゴリーのあり方をまとめておこう。スキナーにおいて、歴史家は異なる時代に自分以外に向けてなされた発話を理解しようとする聞き手と考えられる⁸³⁾。スキナーにおけるコミュニケーションの前提から、この理解が目指すのは、著者の意図した発語内的力の正確な同定である。他方で、スキナーにおいて、歴史家は信条やイデオロギーの歴史的な異質性を研究するものとされ、この異質性が思想史研究の有意性をなすものとされる。著者と歴史家は言語慣習の異質性において隔てられている。しかしこの同定という目標と言語慣習の異質性との間の関係は明瞭ではない。この関係が思考されるためには、言語が

時間の中でどのように変容し、どのような契機において連続または断絶するかについての理論的な枠組みが必要となるだろう。

ポーコックにおいて、著者と歴史家とは、断絶しながら連続して行く諸言語の持続、受容と応答の過程によって結びつけられる。著者のオリジナルなテキストに重ねてなされる諸々の言語的な遂行の連鎖が、歴史家が現在にあって著者のテキストを研究することを可能にする。そしてポーコックの歴史家は、現在にあって著者のテキストに関する歴史的な研究を可能にしているこの言語的な遂行の連続体が持続して行く時間的な過程を研究する。この過程の理解は、歴史家自身の手になる言語によって行われる。なぜなら、歴史家が直面している歴史的な諸言語に対して歴史家は聞き手の位置に立つからである。話し手に対する聞き手、著者に対する読者、過去の言語に対する現在の人間がそうするように、諸言語の連続体に向き合う歴史家は、この諸言語の連続体の中において、同時にこの連続体について自分自身の言語で語ることにより理解を与える。すなわち歴史的研究自体の条件となる諸言語の持続を、現在において、自らの言語において再構築しつつ、それぞれの時点にあって受容され解釈され発話されることによって断絶しながら連続してきた諸言語の歴史的な過程を研究するのである。

おわりに

両者の思想史研究相互の位置関係を明らかにすることが本稿の第一の課題であった。両者の位置関係を、本稿第Ⅱ節および第Ⅳ節より以下のように理解することができる。スキナーはテキストにおける著者の純粋な行為を問題として選択し、ポーコックはテキストの成立以降、このテキストにおける著者の行為を起源として生じた無数の言説活動を問題として選択する。両者の選択はそれぞれの「著者の行為」についての理解、そしてコミュニケーションについての理解に基づいている。スキナーにおけるコミュニケーションの理解からするならば、著者の行

83) Skinner, *op. cit.*, p. 135.

為は著者自身が理解している形において理解されるべきであり、したがってテキストに関する著者自身の理解が第一義的な問題となる。ポーコックにおけるコミュニケーションの理解からするならば、著者の行為についての解釈や応答、またはそれに基づく新たな言語行為もまた著者の行為の一部を成す。したがって、著者の行為ばかりでなく、著者の行為がなされて以来、その上に積み重ねられてきた無数の言語行為をも理解することが、第一義的な問題となるのである。

しかし、両者の相違はこうした単なる研究対象の範囲の相違にとどまらない。本稿の第二の課題はポーコックの方法論が有する固有の意義を明らかにすることであった。この固有の意義を、本稿第Ⅲ節および第Ⅴ節より以下のように理解することができる。ポーコックの方法論は、著者の行為時点以降の行為の持続という領域にあって、スキナーにはない思想史のための思考の枠組みを生み出しており、この点でスキナーに対する相違は積極的な意義を有する。すなわち、ポーコックの方法論は、言語がいかに変容するか、異なる時代において言語がいかに連続しまた断絶するか、そうした言語の連続と断絶の中で歴史家は著者のテキストとどのように関係しうるか、という問題に——ポーコックはこれらの問題に対し自らの個別的な思想史研究において実践的なレベルで解答しているのではあるが、それにとどまらず——理論的なレベルで一つの解答を与えているのである。

言語の変容は、認識の図式であると同時に対話・社会的関係の様式である言語が、それに扱うことのできない未知の出来事——時間的な次元——に晒された際、こうした未知の出来事を認識しようとする思考と認識を共有しようとする対話の試みにおいて現れる。この変容の途上、かつての言語が忘れられ、新たな言語が生成する過程が、異なる時代の間での言語の連続と断絶を生み出して行く。こうした連続と断絶は、

著者のテキストを起源とするきわめて複雑な言説の複合体を形づくるだろう。しかし同時に、こうした連続と断絶からなる過程が、時代に隔てられた過去の著者と現在の歴史家を結ぶものでもある。

もしテキストが誰にも知られることなく埋もれていたならそれは言説の歴史に何の痕跡もとどめなかっただろう。言語行為に関しては、受容されるということが決定的な契機である⁸⁴⁾。受容され、共有の用法になってこそ、発話は言語の変容を引き起こしたといわれうる。したがって言語の変容を発話の意義として捉えるならば、著者の意図というカテゴリーは発話を理解するのに十分ではない。著者は言説の複合体から切り離しえない。

他方で、歴史家は、受容により変容された言語の内部にある。テキストの研究を開始するとき、歴史家はそのテキストに関わって生み出された言説の複合体の内部にいるのである。そのため、歴史家が著者の意図を問うという行為さえ、この言説の複合体から切り離しうものではない。歴史家にとって著者との間の中間の時代は重要な意味を持つ。

ポーコックの方法論は、歴史家を混乱させるとともに著者に結びつけるこの言説の複合体を、互いに政治的（ポリス的）・歴史的な関係にある諸言語の連続体として構造化する。ポーコックの方法論は、研究者が単に歴史的な思想——すなわち、現在とは異質であって無時間的なカテゴリーによっては扱えない思想——を扱っているという意味での歴史研究から、ある思想が無数の転用と言及を媒介として実際にどのように変遷してきたかという歴史的な枠組みをもった歴史研究への転換を可能にする。それは言語の変容、その連続と断絶、その中での著者・歴史上の応答者・歴史家の有する関係とを組織化し、これらの問題を個別的なレベルで思考する可能性を歴史家に与えるものなのである。

84) ポーコック、「政治言説史と言語の政治学1」27-28ページ。